

農作物技術情報 第4号の要約

平成24年 6月28日発行
岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部

作目	技術の要約
水稲	<p>生育状況: 水稲生育は平年より4日程度の遅れと見込まれ、茎数の増加もやや遅れている(特に沿岸部)。</p> <p>技術対策: 目標茎数に達していない圃場では浅水管理を続ける。既に目標茎数を確保した圃場ではすみやかに中干しを行う。幼穂形成期頃から徐々に深水管理を開始する。畦畔雑草や転作牧草などイネ科植物が出穂しないよう管理する。</p>
畑作物	<p>生育状況: 【小麦】成熟期は概ね平年並みで、刈取間近。【大豆】生育は順調。</p> <p>小麦: 子実水分を確認し、適期刈り取りに努める。また、倒伏圃場や品質に問題があるものは刈り分けし、良質な小麦に混入しないよう注意する。</p> <p>大豆: 中耕は初期除草剤(土壌処理剤)の効果がなくなり、雑草が発生し始めてから実施。培土は倒伏防止や、根系への酸素供給などに効果がある。培土の高さは収穫に支障を来さないよう一定に。</p>
野菜	<p>生育状況: 施設果菜類は成り疲れや着果負担がみられるものの生育回復、露地果菜類はほぼ定植が終了。露地葉菜類はキャベツで収穫開始が5日程度遅れたが、他は概ね順調に生育。雨よけほうれんそうは一部に乾燥や低温の影響が見られるが概ね順調に生育。</p> <p>果菜類</p> <p>【雨よけトマト】【雨よけピーマン】生育のバランスを保つため適切なかん水、施肥に努める。灰色かび病等の発生がみられるので、換気を心がける。</p> <p>【露地きゅうり】生育に応じた整枝、摘葉と、斑点性病害を対象とした予防散布に努める。</p> <p>雨よけほうれんそう: ハウスの温度、湿度管理を適切に行い、高温や過湿による病害発生や生育不良を防ぐ。コナダニ類の防除対策を徹底する。</p> <p>キャベツ、レタス等: コナガ、ナモグリバエ等害虫の適期防除を行う。</p>
花き	<p>生育状況: りんどう、小ぎくともに平年並みの生育で、概ね順調。</p> <p>りんどう: 褐斑病、リンドウホソハマキなど病虫害防除を継続して行う。定植圃場の管理も徹底する。</p> <p>小ぎく: 適期作業に努めるとともに、病虫害防除の徹底を図る。事前に排水対策を講じ、湿害を回避する。</p>
果樹	<p>生育状況: りんごの果実生育は概ね平年並みまで回復。ぶどうの新梢伸長も平年並み～やや進んでいる。</p> <p>りんご: 翌年の花芽形成を促すため、適期管理に努める。</p> <p>ぶどう: 結実を確認のうえ、適切な摘房、摘粒を実施する。</p>
畜産	<p>草地管理: 二番草の刈り取りは、適期に、刈り取り高さが低くなりすぎないようにする。除草剤の播種日同日処理による草地更新の準備を始める。</p> <p>暑熱対策: 嗜好性の良い粗飼料、夜間の粗飼料給与など、暑熱の影響の緩和に努める。</p>

詳細については「いわてアグリベンチャーネット」をご覧ください。 <http://i-agri.net> (「いわてアグリ」と検索すると上位に表示されます)

○農薬適正使用: 使用前に必ずラベルを確認し、使用基準の厳守と飛散防止を心がけてください。

○農作業安全: 事故のないよう、農作業安全に十分留意してください。

次号は平成24年7月26日発行の予定です

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第4号 水稻

発行日 平成24年 6月28日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 6月25日現在、水稻生育は平年より4日程度の遅れと見込まれ、茎数の増加もやや遅れています(特に沿岸部)。
- ◆ まだ目標茎数に達していない圃場では、分けつ発生を促す浅水管理を続けましょう。すでに目標茎数を確保した圃場では、すみやかに中干しをしましょう。
- ◆ これから幼穂形成期や減数分裂期など低温に弱い時期を迎えます。幼穂形成期頃から徐々に深水管理を開始しましょう。
- ◆ 斑点米カメムシ類の増殖を防ぐため、畦畔雑草や転作牧草などイネ科植物が出穂しないよう管理しましょう。

1 生育概況

6月25日に各農業改良普及センターが実施した水稻の一斉生育調査(23カ所、延べ33品種)の結果、県全体では草丈が35.4cmと平年より2.4cm低く、 m^2 あたりの茎数は397本と平年比96%です。葉数は7.9葉で平年より0.6葉少なく、葉数の進捗からみた生育は平年より4日程度の遅れと見込まれます。また、平年よりSPAD値が低く、葉色は全般に薄い(詳細は表1、2を参照)。

特に、低温寡照で経過している沿岸部の生育量(草丈・茎数)は内陸部に比べて小さい現状です。

表1 平成24年生育診断ほの地域別集計表(6月25日現在)各農業改良普及センター調べ

地帯名	草丈			茎数			葉数			葉色(SPAD値)	
	本年 (cm)	平年 (cm)	平年差 (cm)	本年 (本/ m^2)	平年 (本/ m^2)	平年比 (%)	本年 (枚)	平年 (枚)	平年差 (枚)	本年	平年
北上川上流	35.2	37.0	-1.8	379	372	102	7.6	8.1	-0.5	39.7	40.9
北上川下流	35.7	38.4	-2.7	410	425	96	8.1	8.7	-0.6	39.5	41.8
東部	32.9	34.0	-1.1	349	410	85	7.8	8.7	-0.9	39.3	39.8
北部	34.0	35.4	-1.4	338	432	78	7.3	7.5	-0.2	36.3	36.8
全県	35.4	37.8	-2.4	397	413	96	7.9	8.5	-0.6	39.4	41.3

注: 平年値は原則として平成19年から23年までの5か年の平均値を用いた。

表2 平成24年生育診断ほの品種別集計表(6月25日現在)各農業改良普及センター調べ

品種名	草丈			茎数			葉数			葉色(SPAD値)	
	本年 (cm)	平年 (cm)	平年差 (cm)	本年 (本/ m^2)	平年 (本/ m^2)	平年比 (%)	本年 (枚)	平年 (枚)	平年差 (枚)	本年	平年
いわてっこ	34.9	35.7	-0.8	345	385	90	7.1	7.5	-0.4	36.1	37.0
あきたこまち	34.0	36.0	-2.0	364	377	97	7.8	8.4	-0.6	40.4	41.8
どんぴしゃり	36.1	38.3	-2.2	424	397	107	8.1	8.7	-0.6	38.1	39.8
ひとめぼれ	35.8	38.3	-2.5	416	449	93	8.2	8.9	-0.7	39.5	42.2

注: 平年値は原則として平成19年から23年までの5か年の平均値を用いた。

2 浅水管理の継続で分けつ促進（茎数がまだ不足している圃場）

平年に比べ茎数の増加はやや遅れていますが、既に目標茎数（目標とする穂数とほぼ同数）を確保した圃場もみられます。

茎数が不足している圃場では、浅水管理を継続し、分けつの発生を促しましょう。

3 中干しの徹底で根の健全化（茎数を確保した圃場）

目標となる茎数に達したところでは「中干し」を行きましょう。

中干しの効果

- ◇ 土壌の還元化をやわらげる→根の伸長促進・健全化
- ◇ 無効分けつの発生を抑える
- ◇ 地耐力の向上→秋作業の容易化

○中干しは、田面に小さな亀裂が生じ、軽く踏んで足跡がつく程度が目安。（7～10日間程度）

○中干しと同時に溝切りしましょう。排水を容易にし、収穫時の地耐力を高めます。

○中干し後、一度に深水にすると酸素不足となり根に障害が出る場合がありますので、中干し直後は間断かんがいとし、その後常時湛水としてください。

4 冷害回避のための水管理

東北地方の1か月予報（仙台管区气象台，6月22日発表）によると、ここ1ヶ月は平年と同様に曇りや雨の日が多い予報です。気温は、1週目（6/23～29）が平年より低い確率60%、2週目（6/30～7/6）は、平年並または高い確率がともに40%です。

これから水稻は低温に弱い時期を迎えますので、今から低温へ備える必要があります。

図1を参考に、気象条件にあわせた水管理により冷害を回避しましょう。

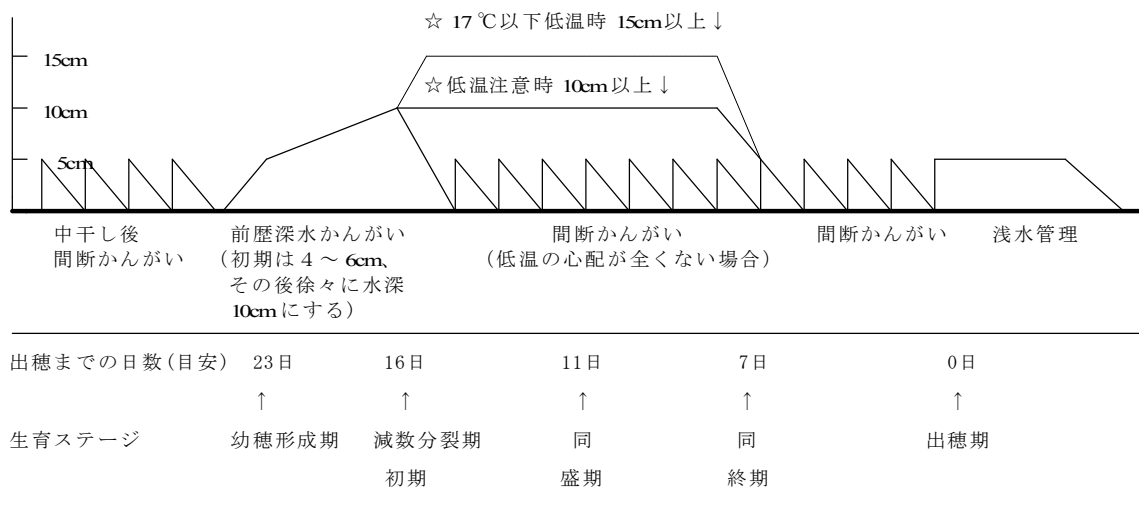


図1 中干し後の水管理の模式図

■ 幼穂形成期前後（前歴深水かんがい）

現在の生育は平年並であり、幼穂形成期も平年並と予測されます。

幼穂形成期の数日前から入水して幼穂形成期には4～6cmの深水にします（前歴深水かんがい）。幼穂を保護することで小孢子（花粉のもと）の分化が促進され、障害不稔を軽減できます。

※ 平年の幼穂形成期

いわてっこ：7月10日頃、 あきたこまち・ひとめぼれ：7月15日頃

■ 減数分裂期前後（深水管理の実施）

少しでも低温が予想される場合は、幼穂形成期の深水管理に引き続き、10cm以上の水深を確保してください。

17℃以下の低温が予想される場合は、15cm以上の深水としてください。

5 追肥

葉色は平年並に経過しています。追肥判断のため葉色の変化に注意が必要です。

良食味米生産の観点から、品種、気象・生育状況を見きわめて、適期に適量を施用しましょう。詳しくは各地域で発行される技術情報等を参考にしてください。

6 斑点米カメムシ類の防除対策

県病害虫防除所が実施した6月中旬の調査によれば、本年も畦畔や転作牧草のイネ科植物で斑点米カメムシ類が確認されています。

以下により、カメムシ類の増殖源となる畦畔等のイネ科植物の管理を徹底してください。

なお、養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する計画がある場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努めてください。

■ 畦畔や転作牧草等のイネ科植物が発生源

斑点米の発生原因となるカメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ）は、畦畔や転作牧草等のイネ科植物で繁殖します。

■ 水稲出穂の15～10日前までに地域一斉に草刈りを実施

畦畔雑草は水稲が出穂する15～10日前までに地域で一斉に刈り取ってください。

■ 水田内の雑草も増殖源となる

水田内にノビエ、イヌホタルイやシズイなどの雑草が多発している圃場では、これらの雑草がカメムシの発生源となりますので、水田内の除草に努めてください。



図2 アカスジカスミカメ成虫



図3 畦畔雑草管理は地域一斉に

7 いもち病防除

(1) 葉いもち

いもち病は気象条件により急激に広がるので、圃場の観察と早期防除を徹底してください。

圃場をよく観察し、発生を確認したら、葉いもち予防剤（箱施用剤、水面・投げ込み施用剤）施用の有無にかかわらず、直ちに茎葉散布を実施しましょう。

(2) 穂いもち

穂いもち対象の予防粒剤を散布する場合は、次の点に留意してください。

- ・ 水稲の生育状況に注意する（散布時期を逸さない）
- ・ 圃場をよく見回り、葉いもちが発生していたら直ちに茎葉散布してから粒剤施用する。
- ・ ストロビルリン系薬剤（嵐剤、オリブライト剤、アミスターエイト）は耐性菌の発生リスクが高いので、嵐剤を箱施用した場合は、オリブライト剤を本田では使用しない。

次号は7月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第4号 畑作物

発行日 平成24年 6月28日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 小麦 間もなく収穫適期を迎え、刈り取りが始まります。子実水分を確認し、適期刈り取りに努めましょう！また、倒伏ほ場や品質に問題があるものは刈り分けし、良質な小麦に混入しないよう注意しましょう。放射性セシウム対策として、収穫・調製時にほ場の土が収穫物に付着しないよう注意しましょう。
- ◆ 大豆 降雨により滞水しないよう、排水対策を確認しましょう。中耕は初期除草剤(土壌処理剤)の効果がなくなり、雑草が発生し始めてから行いましょう。培土は倒伏防止や、根系への酸素供給などに効果があります。収穫時に土を噛み込まないよう培土の高さは一定になるよう作業を行いましょう。

小麦

1 収穫作業前の事前準備

- (1) 小麦の成熟期は概ね平年並みと予想され、間もなく収穫時期となります。コンバインや乾燥機などの点検整備や清掃を事前に行いましょう。
- (2) カントリーエレベータや共同乾燥施設を利用して乾燥調製を行う場合は、受け入れ時間や荷受け水分を前もって確認しておきましょう。
- (3) 品質低下を防ぐために、事前に倒伏ほ場や赤かび病の発生状況を確認し、どの順番で刈り取りを行うかチェックしておきましょう。

2 収穫作業の注意点

- (1) 成熟期になったら、子実水分を確認し、概ね30%以下になったら速やかに刈り取りを行いましょ
- (2) 曇りや雨の日は子実水分の低下が滞りますが、晴天には1日に2~2.5%程度低下します。
- (3) 普通型コンバインでは35%前後から収穫が可能です。
- (4) 降雨等で倒伏がひどいほ場や赤かび病等で品質に問題のありそうな場合は、刈り分けして良質な小麦に混入しないよう注意しましょう。
- (5) 放射性物質対策として、収穫・調製時にほ場の土を収穫物に付着させないよう注意しましょう。また、収穫時にコンバインによる土の噛み込みを防ぐため、できるだけ高刈りし、万ーコンバインのヘッダ部に土を噛み込んだ場合は、作業を止めて清掃を行いましょ

※ 高水分小麦の収穫について

最近では自脱型コンバインの性能が良くなり、水分の高い小麦を収穫できるものもあります。しかし水分が高いと、収穫時に粒がつぶれたり、乾燥時に退色粒が発生したりする危険性があります。やむを得ず高水分での収穫を行う場合には、作業速度や回転数を抑え、丁寧な作業を行い、刈り取り後はできるだけ早く(1時間以内)乾燥作業に入りましょ

3 乾燥について

収穫された麦をそのまま長時間放置すると、変質し異臭麦や熱損傷が発生します。刈り取り後はできるだけ早く乾燥機へ搬入しましょ。また、乾燥機的能力にあわせて収穫作業をすすめ、速やかに乾燥を行いましょ。

- (1) 送風温度は子実水分が高いほど低く設定します。子実水分 35~30%では送風温度 40℃以下、子

実水分 30%以下では送風温度 45℃以下とします。

- (2) 高温で急激に乾燥すると、熱損傷や退色粒が発生する場合があります。
- (3) 水分が高いほどテンパリング時間は短く設定します。(子実水分 30%前後では 1 時間以内)
- (4) 乾燥機への張り込みは循環型乾燥機では容量の 7 割程度、平型では堆積の高さを 20cm 程度に抑えましょう。
- (5) ビンやサイロに一時貯留する際は、水分が 17~18%程度になるまで 1 次乾燥してから貯留し、3~4 日以内には仕上げ乾燥を行いましょ。仕上げ水分は 12.5%以下です。

大豆

1 概況

今年大豆の播種作業は概ね順調に行われました。出芽揃いも良く生育は概ね順調です。

2 排水対策の確認

大豆の生育初期は梅雨の時期に重なります。降雨後の滞水により湿害や茎疫病などの病害が発生しないよう、畦溝と排水溝との連結、明渠や水尻にゴミなどの詰まりや崩れがないかの確認、排水口（フリードレン下部）の掘り下げなど、ほ場内排水を促進するよう努めましょ。

3 中耕・培土

- (1) 中耕培土は、大豆の 3 葉期に 1 回目を実施することが一般的ですが、初期除草剤（土壌処理剤）の効果がなくなり、雑草が発生し始めたら早めに行いましょ。
- (2) 培土は収穫時に土を噛み込まないよう高さを揃え、根元まで土がかかるように行いましょ。

※ 中耕培土の効果

- ・雑草防除
- ・倒伏防止
- ・土壌の通気性を良好にし地温を上昇させ根の機能を向上させる
- ・発根を促進し、根群を発達させる
- ・土壌の排水を良好にする

4 生育期の除草剤散布について

近年、広葉雑草を対象として、大豆の生育期に全面散布できる除草剤や、畦間あるいは畦間・株間に処理できる非選択性除草剤の登録が増えてきました。発生する草種や発生量を確認し、効果のある剤を遅れずに散布ましょ。

生育期の広葉雑草を対象とした除草剤の特徴と散布方法の注意点は以下のとおりです。

(1) ベンタゾン液剤（全面散布）

- ア 選択性除草剤であり、作物の上から散布できます。
- イ 散布用具として、既存の器具が使用可能です。
- ウ 大豆の品種によっては薬害を大きく受ける場合があります。
- エ 広葉雑草の光合成を阻害する作用を持っています。晴天が続くときに散布することで、効果的に使用することができます。
- オ イネ科雑草には効果が無く、シロザ・ツユクサ・ヒユ類・エノキグサ等に対する効果が不安定ですので、これら雑草の優先するほ場では使用を避けましょ。
- カ 水稲用のベンタゾン液剤は使用できません。必ず大豆用のベンタゾン液剤を使用してください。

(2) グリホサートカリウム塩液剤（畦間処理）

- ア 非選択性除草剤であり、作物に飛散させないよう十分に注意ましょ。
- イ 株間には絶対に散布してはいけません。
- ウ 散布器具として吊り下げの専用ノズルが必要であり、飛散防止用カバーを用いて散布するようになましょ。
- エ ベンタゾン液剤では効果の低い草種が優先するほ場でも高い効果が得られます。
- オ 散布後に発生する雑草に対しては効果がありません。

(3) リニュロン水和剤、グルホシネート液剤（畦間・株間処理）

- ア 非選択性除草剤であり、本葉に飛散させないよう十分に注意ましょ。

イ 散布器具として、吊り下げの専用ノズルが必要です。

ウ 畦間及び株間の雑草に対して効果が期待できません。

エ リンキュロン水和剤はイネ科雑草には効果がなく、シロザ等に対する効果が不安定ですが、雑草茎葉兼土壌処理剤であることから、散布後に発生する雑草に対しても抑制効果が見込まれます。

次号は7月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第4号 野菜

発行日 平成24年 6月28日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆施設果菜類 換気の徹底、適切な肥培管理・水分管理と病害虫防除を！
- ◆露地きゅうり 生育に応じた整枝・摘葉管理と病害虫防除を！
- ◆雨よけほうれんそう 天候の変化に応じた適切な管理を！
- ◆露地葉茎菜類 病害虫防除の徹底と計画的な作業により良品出荷を！

1 生育概況

- (1) 施設果菜類は順次収穫が行われています。早熟作型のきゅうりは概ね順調ですが、一部で成り疲れやべと病等の病害の発生がみられています。雨よけトマトの収穫開始は例年より1週間程度遅れたほか、着果負担により草勢が弱くなっている圃場が散見されています。病害では灰色かび病の発生がみられています。ピーマンの生育は概ね順調ですが、アブラムシやアザミウマの発生がみられています。
- (2) 露地果菜類の定植はほぼ終了しました。露地きゅうりや露地ピーマンは定植後の乾燥により生育が停滞した圃場が一部でみられました。
- (3) ほうれんそうの生育は概ね良好ですが、乾燥の影響による生育停滞が一部地域で見られるほか、ケナガコナダニの被害や萎凋病等による立ち枯れ症状も見られています。
- (4) キャベツは例年より5日程度遅れて県北部でも収穫が始まりました。定植作業や生育は順調ですが、べと病の発生が例年より多くなっています。レタスは菌核病、灰色かび病がみられるものの順調に生育しており、県北部・高冷地での出荷が平年並みの6月上旬から始まっています。

2 台風4号に伴う事後対策

- (1) 6/20の台風に伴う激しい風雨により、茎葉損傷等の被害が発生しています。傷んだ茎葉や果実は摘除し、茎葉に泥土が付着している場合は動力噴霧機により水をかけて洗い流すとともに、品目ごとの防除指針に従って殺菌剤を散布し、病害の発生・拡大を未然に防止します。
- (2) 圃場に滞水している場合は、ポンプなども活用して速やかに排水してください。排水後、圃場作業が可能になったら畦間の中耕を行って土壌中に空気を送り、根の活性化に努めます。必要に応じて液肥を薄い倍率でかん注または葉面散布し、草勢回復を促します。
- (3) また、梅雨に入りましたので、今後も大雨に備えて排水溝の整備・点検を行います。特に、圃場外からの侵入水を防止するため、圃場やハウスの周囲にあらかじめ排水溝を設けておきましょう。

3 技術対策

(1) ハウス果菜類の管理

ア 雨よけトマト

雨よけ栽培では、収穫開始時期を迎え草勢のバランスを崩しやすい時期に入ります。着果量や

生長点付近の状態（生長点の大きさ、葉色、葉の巻き具合、茎の太さ）を確認しながら、適切な追肥やかん水により草勢を維持することがポイントになります。つる下げ作業も、一気に下げてしまうと極端に草勢を落としますので、こまめに行うようにしましょう。

特に今年は着果数が多い傾向があり、着果負担から草勢低下を引き起こしている事例が見受けられますので、天候と生育状況に応じたかん水施肥管理を行って下さい。

また、今後は降雨とともに灰色かび病や葉かび病の発生が多くなってきます。曇天時でもこまめに換気し、かん水は晴れた日の午前中に行うようにして、できるだけハウス内の湿度を高めないようにします。曇雨天時のわき芽かき作業は、病気を伝染する場合がありますので、晴天時に作業するようにして下さい。薬剤防除は灰色かび病や葉かび病、アザミウマ類、アブラムシ類の防除を基本とした薬剤を選定し適期防除に努めます。

イ 雨よけピーマン

4本仕立ての整枝法は、第10分枝まで側枝3~4節摘心、第11分枝以降は2節摘心が基本です。側枝を伸ばして着果数を多くすると草勢が低下しやすくなるので、株の下まで光が当たるように側枝の摘心を行います。

特に「京鈴」等の草勢の弱い品種は、収穫や整枝作業が遅れないようにし、かん水と追肥は少量多回数を基本に行い、草勢を低下させないよう管理に努めます。

また、圃場への浸水や多かん水により株元が過湿となると疫病が発生しやすく、乾燥してくると尻腐果の発生が目立ってきますので、pFメーターを目安として水分管理を行うとともに、今後は株元を乾かすような管理を心がけましょう。

一方、病害は灰色かび病が発生しやすい時期です。雨よけトマト同様こまめに換気を行いハウス内の湿度を高めないようにします。害虫は高温とともにアザミウマ類やハダニ類が多発してきますので、アザミウマ類は花の内部を、ハダニ類は葉の裏側をよく観察し適期防除に努めます。

ウ 夏期高温期の昇温抑制対策

夏期高温に備え、遮光幕や塗布型遮光剤の利用を検討しましょう。資材の種類により効果の持続性に差があるので考慮して利用してください。

また、肩より上部での換気実施やツマ面の開放等により、できるだけハウス内に熱気がこもらないように工夫して下さい。

梅雨明け後は、品目により通路散水や通路への敷きわら等も地温やハウス内気温の昇温抑制に有効ですので、総合的対策を今から検討しておきましょう。

(2) 露地きゅうり

本格的な収穫を迎える時期となりました。収穫量に応じた追肥とかん水で草勢を確保します。特に乾燥気味の圃場では、かん水や敷きわらなどで土壌水分の保持を図ります。また、1本仕立ての場合の生育中期~盛期における基本的な整枝、摘葉管理は下表を参考に行います。

ただし、品種や草勢により管理技術は多少異なりますので、あくまでも目安としてください。

2本仕立ての場合は、主枝8~10節から発生する側枝を、1本伸ばします。それ以外の主枝10節までの側枝は1節摘心とし、主枝11節以降は2節摘心または半放任とします。

病害虫防除では、7月はべと病や褐斑病、炭そ病等の斑点性病害の予防に重点をおきます。特に褐斑病は、例年圃場で発生が見られる7~10日前からの予防散布が重要です。

なお、斑点性病害は薬剤散布による防除だけでなく、圃場内への蔓延を防ぐため疑わしい病斑が見られたら積極的に摘葉し、速やかにほ場外で処分しましょう。

表1 生育中期～盛期の整枝、摘葉方法（例）

	子づる	孫づる	整枝のポイント	摘葉のポイント	その他
上段	1節摘心	半放任とし、混み合った部分のみ摘心する	1. 親づるは、生育が順調な場合は支柱の肩の部分で止めるが、上段の子づるの発生が悪い場合、発生が緩慢な品種、親づるの心が小さい場合は遅く止める	1. 台木や穂木の子葉は摘除する 2. 病葉や老化葉を優先的に摘除するが、子づる、孫づるの生長点を覆っている葉を株当たり2～3枚/回を目安に除去する	放任枝とネット沿いに発生した子づるはテーブナーでしっかり止めるが、それ以外の枝は誘引せずきゅうり全体に光が当たるよう樹を立体的に仕上げる
中段	2節摘心	1節摘心ただし、草勢が弱い場合は早止めしない	2. 親づるの摘心後、草勢維持のため放任枝を2～3本残す。作業しやすいように腰～肩の範囲に子づるを張らせる。中段の子づるは収穫後1節残して切り戻す	3. 膝から下は摘葉し、通風を良くする 4. 親づるの摘葉は親づるの摘心後1ヶ月間を目安に終了する	
下段	1節摘心	1節摘心	3. 膝から下の子づる、孫づるは収穫後親節から切り戻す		

※下段：～10節程度。中段：11～20節程度。上段：21節～

(3) 葉菜類の管理

ア 雨よけほうれんそう

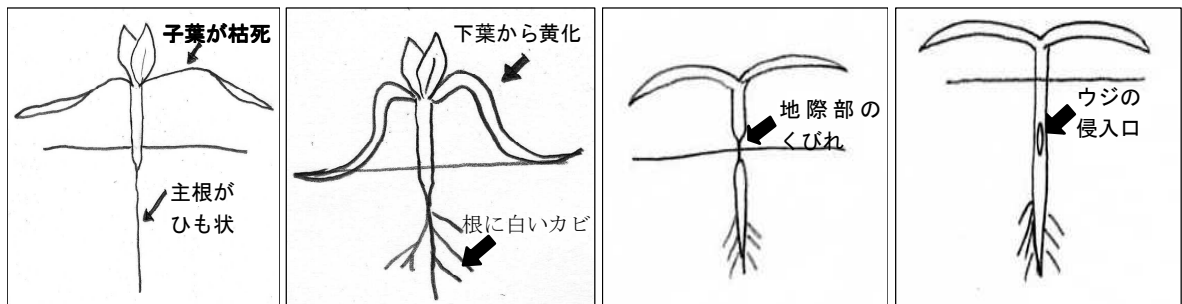
梅雨に入り低温・日照不足から高温・多照へ天候が急変することが多くなります。換気や遮光をタイミングよく行って、しおれや徒長を防ぎましょう。

ほうれんそうの生育には厳しい時期となりますので、各産地で選定している夏播き用の品種を利用して、必要に応じて生育中のかん水も行いましょう。

地上部が萎れる原因は病害によるものだけではありません。高温障害、土壌病害虫等の判断方法は下図を参照してください。

また、圃場内へ雨水が流入したりハウス内が過湿になることがないように、圃場周囲の排水対策を確認しましょう。

この時期はべと病が発生しやすく、べと病に抵抗性のある品種でも発病する場合があります。ハウス内が過湿にならないよう換気に努めるとともに、株間を広くして風通しを良くし、被害株は随時抜き取り処分します。例年発病が多い圃場では、予防散布を徹底しましょう。



根腐病の症状

萎凋病の症状

高温障害の症状

タネバエによる被害

図1 ほうれんそう生育初期の萎れの原因の判断方法

イ キャベツ

ヨトウガの発生が増えてくる時期を迎えています。定植時の処理剤の利用を徹底するとともに、防除が遅れないように注意しましょう。コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤によるローテーション散布を基本とします。

また、収穫を終了した圃場をそのまま放置すると害虫の発生源となりますので、収穫後は早めに圃場を整理しましょう。

結球期に降雨が続くと株腐病の発生が多くなります。結球開始期から株元にも十分薬液がかかるように薬剤散布を行ってください。圃場の排水対策についても確認しましょう。

ウ レタス

気温の上昇、降水量の増加にともない、すそ枯病、軟腐病などの腐敗性病害や灰色かび病の発生が多くなります。特に大雨が引き金になって、病害が多発する場合がありますので、気象情報などを参考にして、降雨の前後の防除に重点を置きましょう。また、これから定植する作型では、排水の良い圃場を選んで作付けするとともに、前作の残渣を圃場外に持ち出す、適湿のときにマルチを張り過湿を防ぐ、といった対策を心がけましょう。

高温期の過剰施肥は変形球や腐敗の発生を招きやすいので、施肥量を控えめにすると共に、適期に収穫して品質の向上に努めましょう。

エ ねぎ

生育に応じた追肥、土寄せにより葉鞘の伸長を促しましょう。特に早出しを狙う作型では、無理に土寄せすることで葉鞘が細くなりすぎないように注意しましょう。今後、気温の上昇、降水量の増加が予想されますので、圃場の排水対策を講じます。

また、大雨直後に土寄せを行うと軟腐病など病害発生の原因にもなりますので、圃場の水分が低くなってから行うなど作業のタイミングに注意し、状況に応じて効果のある薬剤で防除してください。

次号は7月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第4号 花き

発行日 平成24年 6月28日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ りんどう 褐斑病、リンドウホソハマキなどの病害虫防除を徹底しましょう
- ◆ 小ぎく 白さび病、ハダニなどの病害虫防除を徹底しましょう
収穫前に次年度用の健全な親株を選抜しましょう
- ◆ 共通 ほ場乾燥が続く場合は早めにかん水しましょう
圃場の排水対策を実施し、湿害を回避しましょう
切り前・選別基準の遵守により、揃った品質で出荷しましょう

りんどう

1 生育概況

露地りんどうの生育は概ね平年並みとなっています。県南部では極早生品種の開花が6月中旬から始まっています。リンドウホソハマキは成虫の発生がダラダラと続いているので、継続して防除が必要です。また、葉枯病の発生がみられています。

2 圃場管理

(1) 株養成

定植後の乾燥は、苗の生育に大きく影響します。干天が続く場合は必ずかん水し、圃場の状態によってはうね間かん水を実施します。また、定植1年目に葉枯病やリンドウホソハマキが発生すると翌年の株落ちの原因となります。採花圃場と同様に病害虫防除を徹底します。

(2) ネット上げ

フラワーネットの最上段が草丈の7割程度の位置となるように、こまめに上げて茎の曲がりの発生を防ぎます。また、ネットに葉が引っ掛かり曲がることも多いので、随時圃場を見回り、修正してください。

(3) かん水・排水対策

大雨が予想される場合、水路などからの水の流入を防止するとともに、排水路の点検を行うなど排水対策を講じてください。また、反対に雨が少なく乾燥気味の場合には、極度に乾燥する前に通路等にかん水します。

(4) 収穫・調製・出荷

ア 収穫

収穫は頂部の蕾が膨らみ色づいた頃が標準です。ただし、出荷先やバケットなどの輸送形態等により早めの収穫とする場合もありますので、事前に確認し仕向け先に合わせた切り前とします。

収穫は日中の高温となる時間帯を避け、涼しい朝夕に行います。やむを得ず日中採花する場合は、収穫後直射日光に当たらないようにし、速やかに日陰に運び水揚げを行います。

株の消耗を防ぐため、必ず3本程度の茎を残し、残った茎は残花部を折り取って種子が作られることによる消耗を防ぎます。また、残花部の折り取りはアザミウマ類やアブラムシ類の被害軽減にも効果的です。

イ 乾燥

雨天時に収穫した場合や朝露がついている場合は、扇風機や切り花乾燥機を用いて必ず乾燥させます。濡れたまま結束したり箱詰めしたりすると輸送中の蒸れなどによる品質低下の原因となります。

水を切るため逆さにして振ることは、茎が折れることに加え、花の蜜が花卉や葉などに付着して品質低下の原因となる場合があるので極力避けます。

ウ 選別

花段数、長さ、太さ、曲がりなどを基準に選別します。出荷規格を遵守し、信頼を落とさないようにします。病虫害の被害があるものは出荷しないことを基本とします。

また、暗い作業場での選別作業は病虫害痕の見落としなど品質の低下につながることで、作業者の目が疲れ作業性の低下や疲労が増大することとなります。りんどうの選別は花段数の確認等で目を酷使していますので、作業場全体と選別を行う作業台の明るさを十分確保します。

エ 調製・水揚げ

選別調製後、規格別に10本束にして水揚げを行います。

束とする10本の切り前や品質が揃うよう留意します。水揚げが長時間になると輸送中に蒸れることがあるので、極端に長い時間（24時間以上）の水揚げは控えます。

オ 箱詰め

各部会等で決められた方法で箱詰めを行います。輸送中に花束が動いて傷むことがないように確実に固定します。

(5) 病虫害防除

ア 葉枯病

これまでのところ下位葉部分に発生が見られていますが、降雨により急激に増加し、中上位葉まで発生することがあります。定期的に薬剤散布し発生を予防します。薬剤散布は降雨前に行うことが理想ですので、気象情報を確認しながら効果的な防除を行います。

イ 褐斑病

7月下旬まで重点的な防除を継続します。発生してからでは薬剤の効果が高いので予防散布に努めます。

早生種では収穫時期が近いので、葉の汚れに注意し、ダコニール1000+展着剤または、ストロビーフロアブルを使用します。葉枯病との同時防除とする場合はダコニール1000を選択します。



写真1 褐斑病

ウ ハダニ類

今のところ発生量は少なめですが、高温・乾燥により発生が多くなりますので、発生密度が高くなる前に薬剤散布を行ってください。薬剤散布は散布量を十分に、葉の裏側を洗うように散布すると散布むらも無くなり効果が高まります。

なお、ダニ剤の使用においては同系薬剤の1年1回使用を基本に、抵抗性の発現を避けてください。

エ リンドウホソハマキ

昨年、大発生した圃場では要注意害虫です。県中南部では5月下旬から成虫の発生や産卵が確認され、6月中旬以降、頂部の食害や茎への食入が増えてきています。また、県北部や積雪の多い地域でも6月初めには成虫の発生が確認されています。発生ピークが判然とせずダラダラと発生が続いていますので薬剤散布を継続し防除してください。

また、第2世代の発生が7月中～下旬に予想されます。被害が散見される圃場では、圃場をよく観察して被害茎を折り取り処分するなど防除を徹底してください。



写真2
ホソハマキの頂部食害



写真3
ホソハマキの茎への潜入痕

オ アザミウマ類

蕾がふくらみ着色が始まる頃から蕾に侵入し、花卉を吸汁する被害が見られます。蕾の中に入ると薬剤がかからず、大量に増殖して被害が大きくなりますので、侵入を防ぐよう寄生前の予防に努めます。

アザミウマ類は雑草を含むあらゆる植物に寄生するので、周辺の作物の防除、雑草の処理を必ず行ってください。また、着蕾期前にシルバーの反射テープを支柱上部に張ることで、アザミウマの発生が大幅に減らすことが可能な現地事例があります。さらに、残花茎でのアザミウマの増殖を抑えるために、収穫が終わった圃場の残花茎は全て折り取り処分します。

小ぎく

1 生育概況

4月の低温、天候不順により定植に若干の遅れがみられましたが、生育は概ね平年並みとなっています。白さび病の発生がやや多く、ナモグリバエ、キクスイカミキリ等による害虫の被害がみられています。

2 圃場管理

(1) かん水

雨が少なく圃場が乾燥すると側枝の伸長不良や開花遅れの原因となるので、極度に乾燥する前にかん水します。一方でりんどうと同様に長雨や集中豪雨に備えて排水対策を講じます。

(2) 整枝

側枝が20～30cmに達した頃に株あたり生育の揃った側枝が3本程度が残るように整理します。

(3) 下葉取り

蕾が見える頃になったら、地際から20cm程度の葉を掻き落とし、通風をよくすることで、病害発生抑制、収穫作業の効率化をはかります。

(4) 収穫・調製

りんどうと同様に、切り前や作業時の環境に留意して収穫・調製を行います。

小ぎくでは、花卉が着色して爪立ちとなった頃が収穫適期となりますが、出荷時期や出荷先、品種によって異なる場合もあるので、仕向け先にあわせた適正な切り前を確認し調製します。

(5) 病虫害防除

白さび病、ナモグリバエ、ハダニ類、アザミウマ類の発生が確認されています。発生前の予防、発生初期の防除を心がけてください。

ミカンキイロアザミウマ等が媒介するキクえそ病 (TSWVによる) などのウイルス病が見られるので、アザミウマ類等の害虫防除を徹底します。圃場内外の雑草が各種害虫の増殖源となるので、雑草防除も必ず行ってください。

(6) 病害株の抜き取り

キクに発生するわい化病 (キクわい化ウイロイド)、キクえそ病 (TSWV)、半身萎ちょう病に

感染した株は薬剤散布などで治療ができないことから、見つけしだい抜き捨て、圃場内に残さないことを徹底します。

感染株を残すことで健全株への感染が広がるほか、感染株を親株とすることで翌年の発生が拡大する原因となります。

3 親株の選抜

次年度用の採穂に使用する親株は、収穫後では形質や病害の感染が確認できないので、収穫が始まる前に次の点に留意して親株の選抜を行い、目印を付けておき、収穫後に親株とします。

- (1) 草丈が十分に伸び、草姿が優れる
- (2) 開花期が目的の時期に合う
- (3) 病虫害（特にウイルス、ウイロイド、半身萎ちょう病）に侵されていない
- (4) 株の生育・充実状態が揃っている

なお、わい化病やキクえそ病に感染した株や、発生株周辺の感染の恐れがある株は必ず抜き捨てて圃場に残さないことが被害拡大防止の基本です。

施設花き

1 トルコギキョウ

生育に応じてかん水を控えて締まった草姿を目指します。また施設の温度、肥培などの管理を適正に行い、生育量確保を図るとともに、生育障害発生を抑制します。

2 アルストロメリア

秋の開花を充実するためには夏季は収穫を休み、株充実のため花蕾摘除、葉芽・枯れ茎の整理を行います。品種によって量は異なりますが、夏季は肥料・かん水が過剰にならないよう少なめに管理し、地温を下げるために、遮光や地冷を行います。

また、株養成中にオンシツコナジラミが発生することがあるので、適宜防除を行います。

3 ユリ類

抑制作型では遮光を行って地温低下を図りますが、梅雨期等日照が少ない時期はできるだけ日照を確保するよう遮光率の低いものに換えたり、遮光資材をはずしたりすることも必要です。

4 ストック

7月下旬が無加温作型の播種期です。育苗管理では、施設の気温上昇を抑制すること、苗の生育を揃えるため均一で適切な水分状態を保つことがポイントです。

気温上昇抑制のためには施設を遮光資材で覆うほか、育苗箱を直管やブロックなどで作ったベンチなどに置き、風通しをよくすることや、周辺に散水することなども有効です。ただし遮光資材は育苗後半や曇天時には、除去して徒長を防ぎます。

かん水は、一時に多量にかん水すると胚軸の徒長を招くので、少量ずつ回数多く行います。

八重鑑別は播種後3～5日の発芽揃い時、子葉展開時、定植直前の3回に分けて行います。

次号は7月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報

第4号

果樹

発行日 平成24年 6月28日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ りんご 翌年の花芽形成を促すため、適期栽培管理を進めましょう！
- ◆ ぶどう 結実を確認のうえ、状況に応じた適切な摘房、摘粒を進めましょう。

りんご

1 生育状況

県内の定点観測調査結果によると結実率は平年を上回っています。また、花芽が多いため結実量は平年より多い状況です。翌年の花芽形成と果実肥大を促すため、早期適正着果に努めてください。

果実の肥大(横径)は、着果量が多かったため6月1日時点では平年比80%でしたが、摘果が進み6月21日時点の県平均では概ね昨年並みまで回復してきました(表1)。

表1 県内各定点圃場における果実肥大(横径)状況(6月21日現在)

単位:mm

市町村	地区	つがる					ジョナゴールド					ふじ				
		本年(H23)	前年(H22)	平年	前年比(%)	平年比(%)	本年(H23)	前年(H22)	平年	前年比(%)	平年比(%)	本年(H23)	前年(H22)	平年	前年比(%)	平年比(%)
農研センター		38.1	32.6	37.4	117	102	37.1	31.8	38.5	117	96	36.2	31.5	35.0	115	103
岩手町	一方井	33.7	30.0	32.6	112	103	33.8	31.1	33.7	109	100	31.1	28.7	30.6	108	102
盛岡市	三ツ割	35.1	31.3	36.7	112	96	36.4	32.7	37.5	111	97	34.6	27.7	33.6	125	103
紫波町	長岡	35.7	32.1	38.7	111	92	35.3	30.8	39.0	115	91	38.1	32.5	34.4	117	111
花巻市	中根子	40.3	36.4	37.4	111	108	39.2	35.7	40.7	110	96	36.7	33.5	34.6	110	106
北上市	立花	41.5	36.3	40.8	114	102	38.3	36.8	42.6	104	90	37.8	33.9	37.4	112	101
奥州市	前沢区稲置	37.5	33.6	40.9	112	92	39.7	34.0	41.5	117	96	36.9	36.5	37.4	101	99
	江刺区伊手	33.6	33.9	35.6	99	94	35.3	31.0	36.6	114	96	29.8	26.6	32.0	112	93
一関市	花泉町金沢	39.1	37.3	38.5	105	102	36.0	35.8	39.6	101	91	32.5	33.0	34.0	98	96
	大東町大原	34.3	33.8	36.4	101	94	35.1	34.8	37.1	101	95	30.6	32.2	33.1	95	92
陸前高田市	米崎	35.0	37.6	38.4	93	91	32.5	35.4	37.6	92	86	30.4	32.9	34.5	92	88
宮古市	崎山	32.3	32.5	34.6	99	93	33.2	33.4	36.3	99	91	30.8	32.5	33.1	95	93
岩泉町	乙茂	28.5	31.2	34.9	91	82	31.7	36.1	34.4	88	92	28.7	28.3	32.1	101	89
洋野町	大野下長根	30.6	27.8	28.6	110	107	28.9	29.6	28.9	98	100	28.8	26.2	26.7	110	108
軽米町	高家	-	-	-	-	-	31.5	30.8	34.1	102	92	28.0	26.6	28.7	105	98
二戸市	金田一	34.9	31.4	35.0	111	100	32.6	30.6	35.6	107	92	33.0	28.6	31.2	115	106
県平均(参考)		35.3	33.2	36.4	106.6	97.2	34.8	33.2	37.1	105.2	93.9	32.8	30.7	33.0	107.0	99.2

2 花芽分化と管理

繰り返しになりますが、7月に入ると、りんごは翌年の花芽分化が始まります(表2)。着果過多や日照不足、高温乾燥などが花芽形成を阻害する要因になりますので、(1) 早期適正着果、(2) 徒長枝の整理などによる日照条件の改善、(3) 防除による健全な葉の維持、(4) 適正な土壌水分管理、に努めましょう。

(1) りんごの果実は、摘果作業が遅れると小玉果となる可能性が高くなります。表3の摘果強度に留意して、仕上げ摘果および着果量の見直しを進めてください。結実量にばらつきはみられますが、次年度のためにも計画的に摘果を進めましょう。

(2) 摘果のポイント

- ア 三角実や扁平果など果形の悪い果実、病虫害果、さびなどの傷害果の摘果。
- イ 「ふじ」で果台が極端に長いものや短いものは、斜形果の発生割合が高くなるので、できるだけ摘果します。
- ウ 「ふじ」では、途中で肥大の止まる果実が出てくるので、随時見直しを行います。

表2 主要品種の花芽分化開始時期

時期	7月上	7月中	7月下
品種名	王林		
	陸奥・つがる		
	ふじ・ジョナ		

表3 主要品種の摘果強度

品種名	摘果強度
	わい性樹
紅玉	4～5頂芽1果
ふじ、つがる、王林、さんさ、千秋	5～6 "
ジョナゴールド、陸奥、北斗	6～7 "

(3) 土壌水分管理

りんごの樹体にとって、土壌水分を適正に管理することが果実肥大、花芽の確保など健全な樹体の維持に有効です。

ア 乾燥対策

今後、夏季が高温、干ばつで経過する場合は、養水分の競合を避けるため草生を短く維持し、樹冠下に刈草やわら等でマルチします。また、畑地かんがい施設の整備が進められている地域では、適宜かん水を実施します。

イ 排水対策

降雨が続く、園地内が過湿となる場合、根部が障害を受けて樹勢が衰弱することがあります。園地内に水が停滞しないよう、溝を掘るなど排水対策を講じましょう。

3 樹相診断

樹相診断でりんご樹の栄養状態の良否を判断し、適正な肥培管理に活かしてください。特に「ふじ」の収穫時の果実品質は、今の時期の樹相の良否が大きく影響しますので、樹相診断を積極的に実施しましょう。

岩手県農業研究センターでは、平成21年度研究成果としてりんご「ふじ」わい性台木利用樹の簡便な樹相診断法を報告しています。簡便な樹相診断では、先端新梢の葉枚数を主要な調査項目とし、葉の縦径を補助的な調査項目とします。従来の先端新梢長を測る代わりに先端新梢の葉数を数えることで樹勢の判断が可能です。また、葉の縦径を測ることで葉色の測定に代えることができます。物差しだけで簡単に行えますので、実践してみてください。

表4 「ふじ」わい果樹の簡便な樹相診断基準

調査項目		調査時期	基準値
簡便な診断項目	先端新梢の葉枚数	7月上旬	11～14枚
	葉の縦径		7～8cm
従来の診断項目	先端新梢長		20～30cm
	葉色カラーチャート値		4.5～5.5

(1) 強樹勢の対策

新梢長が長く、葉色も緑色が濃い強樹勢樹については、夏季剪定の実施、冬季剪定時は側枝の間引きを中心として結果枝を多めに残す、施肥量を減じるなどして樹勢を落ち着かせるよう管理します。

(2) 弱樹勢の対策

新梢の伸長が短く、葉色が極端に淡くなるなど弱樹勢樹については、着果量を減らし、冬季剪定で花芽の間引き、延長枝の切り戻し等を積極的に行い、施肥量を増やすなど樹勢の回復を図ります。

表5 「ふじ」わい化樹の樹勢の目安

樹勢	先端新梢の葉枚数 (先端の新梢長)	葉の縦径 (葉色)	新梢停止期	樹相
強勢	17枚以上 (40cm以上)	8cm以上 (カラーチャート5.5以上)	7月中旬以降	栄養成長が盛んで繁茂し、樹幹内部は暗い。
適正	11～14枚 (20～30cm)	7～8cm (カラーチャート4.5～5.5)	6月下旬～ 7月上旬	栄養成長と生殖成長バランスがとれている。
弱勢	10枚以下 (20cm以下)	6.5cm以下 (カラーチャート4以下)	6月中旬以前	栄養成長が弱く、再生産力の弱い樹相。

4 病虫害防除

今後気温が上がり、降雨が続くようになると、斑点落葉病や褐斑病、輪紋病、炭そ病等の感染が増えてきます。また、シンクイムシ類やハダニ類などの害虫も発生してきます。

病虫害防除所の発生予察情報や防除情報を参照し、園地の発生状況をよく観察して、適期防除に努めてください。

ぶどう

1 生育状況 (表6)

6月中旬以降気温が低く、また、日照が少ない日もあり、結実が心配されるころですが、6月15日現在の定点観測地点(紫波町赤沢)の「キャンベル」の調査結果によると、発芽、展葉は概ね平年並み、満開期は6月15日平年よりやや早まっています。

節数はやや少ないものの、新梢長、房長の生育は平年より進んでいます。

表6 ぶどう(キャンベルス・アーリー)の生育状況(観測地点:紫波町赤沢)

調査年次		生態			6月15日時点での生育		
		開花期			新梢長 (cm)	節数 (葉数)	房長 (cm)
西暦	元号	開花始	満開期	落花期			
2012	24	6/12	6/15		81.3	9.5	10.2
平年差・比		-3	-3		110%	94%	102%
前年差・比		-2	-1		104%	90%	128%
2010	22	6/13	6/16	6/19	83.6	10.7	7.5
2011	23	6/14	6/16	6/23	78.5	10.5	8.0
平年(平均)値		6/15	6/18	6/22	73.6	10.1	10.0

2 管理の要点

(1) 摘粒

ア 果粒肥大を促し、裂果や病害の誘発を防ぎ、着色向上など品質確保に不可欠な作業です。

満開後30日以内に終了するのが目標です。

イ 「キャンベル」、「ナイアガラ」、「サニールージュ」は1果房当たり70粒程度とし、二つ折りになる状態を目安に行いますが、縦に1～2列(2列の場合は表側1列と裏側1列)摘粒す

る方法や段抜きなどの簡便法もあります（図1）。

ウ 「紅伊豆」、「ハニーブラック」は1果房当たり30～40粒、「安芸クイーン」は25～30粒とします。最上位に4粒程度着粒させ、下部に行くほど徐々に着粒数を減らし、下端は1粒となるようにします（図2）。

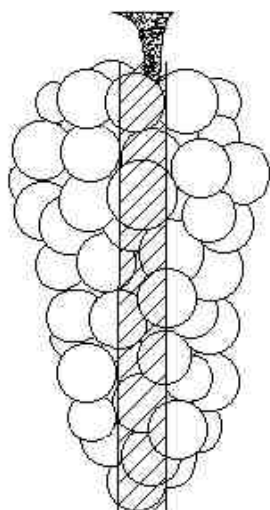


図1 「キャンベル」、
「ナイアガラ」等の摘粒
方法
(2列抜く場合は、表と裏
を1列ずつ抜く)

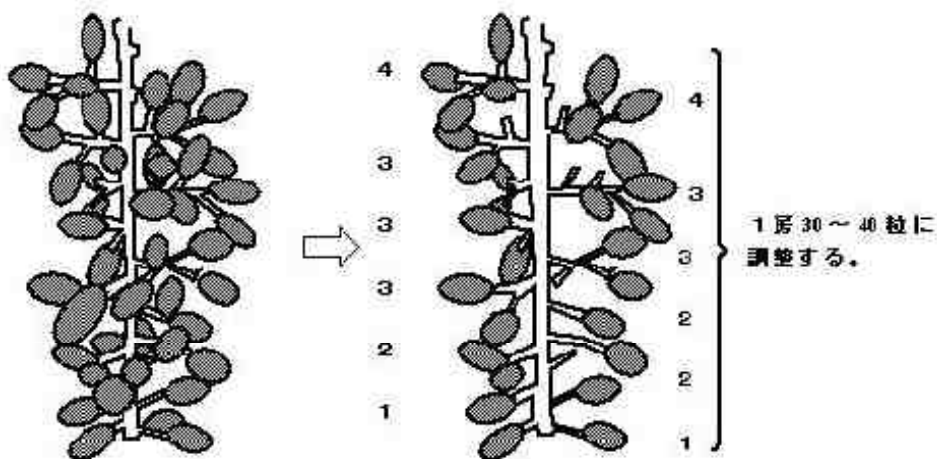


図2 紅伊豆の摘粒方法

(2) 袋掛け

袋掛けの時期は7月上旬以降できるだけ早い時期が良く、摘粒などが遅れる場合には、晩腐病の一次感染期を逃さずに防除し、その後、袋掛けを行うことが大切です。

(3) 摘房

ア 「キャンベル」では、表7を参考に葉数に応じて着房数を決定してください。最終的には一坪(3.3m²)当たり、新梢数20本、着房数27～30房が基準となります。樹勢が弱い場合は、1房当たりに必要な葉数を参照に、葉数に応じて着房数を制限して下さい。

イ 「紅伊豆」、「ハニーブラック」、「安芸クイーン」などの大粒種では、1新梢1房が基本です。強い新梢は、1新梢2房着果させておき、着色期前までに1房に摘房していきます。弱い新梢は、早期に1新梢1房とし、同様に着色期をめぐり、伸長の程度に合わせて2～3新梢1房に調整していきます（図3）。

ウ 着色期以降も着果が多いままだと、着色や糖度上昇が遅れ収穫も遅れる他、樹体の凍寒害の危険が増しますので十分に注意してください。

表7 「キャンベル」の収量構成要素

品種	新梢数 (本/坪)	着房数		必要な葉数	目標収量 (kg/10a)
		(房/坪)	(房/本数)		
キャンベル	20	27～30	1.35～1.5	1房:12～16枚	2200
				2房:17～22枚	

新梢の勢力	作業時期		
	開花期	着色期	収穫期
強	摘穂 (第3～4花穂)		摘房 (第1または第2房)
中	摘穂 (第3～4花穂)		摘房 (第1または第2房)
	摘穂 (第3～4花穂)	摘房 (第1または第2房)	
弱	摘穂 (全部)	→(空枝)	

図3 「紅伊豆」の新梢の強弱と摘穂・摘房時期

3 病害虫防除

- (1) 病害虫の発生状況に合わせて防除を実施します。
- (2) 薬剤によっては、果粉の溶脱、果面の汚れなど品質を損ねることがありますので、薬剤を選択する際は注意してください。

次号は7月26日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第4号 畜産

発行日 平成24年 6月28日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 二番草の刈り取りは、適期に、刈り取り高さが低くなりすぎないようにします。
- ◆ 除草剤の播種日同日処理による草地更新の準備を始めます。
- ◆ 嗜好性の良い粗飼料、夜間の粗飼料給与など、暑熱の影響の緩和に努めます。

1 草地管理

(1) 二番草の収穫など

ア 二番草の刈り取りは、一番草収穫後から 40～55 日が目安です。土壌及び牧草の水分が高く、気温の高いこの時期は、牧草が蒸れ上がり易いので、刈り遅れないようにします。

また、日射量も多いこの時期の極端な低刈りは、地温が上がりすぎ、根が高温障害を受ける恐れがあるので、刈り取り高さは 10～15cm とします。

イ 収穫後はできるだけ早く施肥し、三番草の生育を促します。施肥量の目安は、10a あたり窒素成分で 5kg、リン酸 2.5kg、加里 5kg です。尿散布を行う場合は、肥料焼けを防ぐため、曇天や降雨前後に散布します。

ウ エゾノギシギシは、根茎と長期間発芽能力を有する種子で繁殖するため、完全な防除の難しい雑草の一つです。除草には、選択性除草剤であるチフェンスルフロンメチル剤の茎葉散布が有効です。ギシギシの葉が展葉してから散布します。散布後 21 日間は採草及び放牧ができないこと、クローバーに葉害が出やすいなどに留意下さい。

(2) 草地更新の準備 (除草剤の播種日同日処理)

裸地や雑草が多い圃場では、草地更新の準備を行い、8 月下旬～9 月中旬を目安に永年性牧草の種子を播種します。シバムギなど難防除雑草の占有が多い圃場では、播種の 30 日前位に播種床を形成、雑草を生育させ、播種日に非選択性除草剤を散布する「除草剤の播種日同日処理」が効果的です。

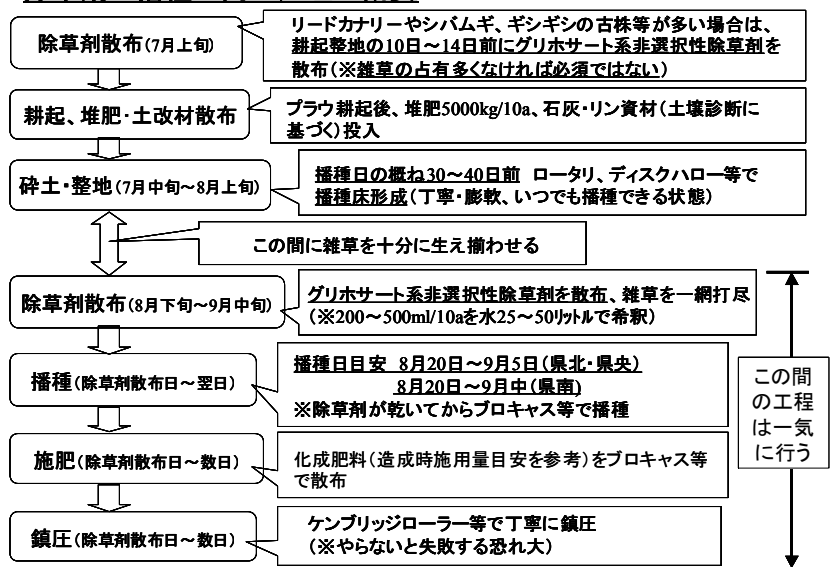
ア 更新の最後に鎮圧作業が必須です。ローラーの準備、ローラーが無い場合は、トラクタ等の車輪で鎮圧が必要です。

イ 雑草の占有が多い、既存植生の生育が旺盛な場合、6 月下旬から 7 月上旬に非選択性除草剤を散布します。

ウ 7 月中旬から 8 月上旬にかけて、耕起、堆肥 (10a あたり 5t を目安) と土壌改良材 (石灰、リン資材) の散布、砕土、整地作業を行います。土塊を十分に砕き、牧草の発芽・定着を安定させるため、播種床形成は、丁寧に行います。この後雑草を十分に生え揃わせます。

エ 播種床形成から 30 日程度経過した 8 月下旬～9 月中旬に、除草剤の播種日同日処理を行います。非選択性除草剤の散布、播種、施肥、鎮圧を期間を開けずに一気に行います。播種、施肥は、散布した除草剤が乾いたのを確認したら、できるだけ早く行います。

除草剤の播種日同日処理の概要



2 暑熱の影響の緩和（乳牛）

本格的な暑さに向け、飼料給与を点検しましょう。

- (1) 輻射熱や直射日光の遮断、換気・送風量の確保により、乳牛の体感温度を低下させます。
- (2) 新鮮な水を十分に飲水できるようにします。水槽の掃除はこまめに行います。
- (3) 嗜好性の良好な粗飼料の給与に努めます。適期収穫で、調製品質の良いものが望ましいです。嗜好性がやや劣る粗飼料の場合は、少量ずつ給与する、嗜好性の良い飼料（配合飼料やビートパルプを水で戻したものなど）を粗飼料に少量ふりかけるなど、採食意欲を高める工夫をします。
- (4) 外気温が低下する夜間から早朝にかけても粗飼料が採食できるよう給与量を増やす、就寝前のエサ押しなどを検討下さい。
- (5) 粗飼料の摂取量や乳量・乳成分が低下し始めたら、次ぎの対応を検討下さい。

ア 配合飼料の給与量の多い搾乳牛では、粗飼料の摂取量、反芻回数とだ液分泌量が減少するため、ルーメン pH低下によるアシドーシスが懸念されます。配合飼料の給与回数を増やす、重曹（100～200g/日・頭）の給与などを行います。

イ エネルギー補給のため、綿実の給与も有効です。ルーメン微生物の活性と乳脂肪分率の維持を考慮し、給与量は1頭あたり1日2kgが上限です。大豆油やパーム油を原料とするバイパス油脂の給与も有効ですが、リノール酸含量が多いものは、繁殖に有益であっても乳脂肪合成を阻害する場合がありますので、給与量は推奨量を参考とします。

ウ 発汗の増加により、カリウム、ナトリウム、マグネシウム、カルシウム、リンなどのミネラル要求量も通常の10から20%増加します。乾乳後期牛を除き、鉍塩を切らさないようにするとともに、重曹を補給し、リン酸カルシウムを増給します。

次号は7月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう